

ラハティでのデザイン教育

児 島 宏 嘉*

自然環境

フィンランドは遠くて近い国？たしかにそう言える点多い。しかし33年間住んでも、つくづく日本とは異なる国なのだと感じる事がある。まず自然条件として国土が北極圏に入りこみ、直行便で成田から飛んでも9時間以上かかり、時差が夏6時間、冬7時間ある。このラハティがある南フィンランドでは夏の暑い日には日中30度を超えることもあり、厳寒の2月頃には零下30度を割ることもある。最高、最低気温の差が時には60度以上あるという所だし、冬の朝、人々は暗い内に家を出て仕事場、学校に向かい、家路に就く頃はほとんど暗くなり掛かっている。ちなみに今年・2002年は11月25日のテレビラジオの天気予報で、ウツヨキ、明日の日の出11時18分、日の入り12時11分、次の日の出は、来年の1月17日11時50分です、と放送される。ウツヨキというのはほぼ北緯70度にあるフィンランド最北の地である。一方、夏はこの辺りでは冬の太陽が沈みっぱなしであった分だけ今度は出っぱなしに成る。当地でも夏至には太陽が地平線の彼方にあることがはっきり分かるほどの沈み方で、夜中に外で新聞の見出しが楽に読め、月も星も見えない白夜である。しかし平均気温が低く、日照期間、トータル温度の不足で米は一切実らず、大豆も栽培できない。18世紀半ばにドイツ経由でジャガイモがもたらされるまで、この地の人々の主食はパンと並んでカブであった。16世紀頃、英国では人と小鳥の相互の利益という事で畑の回りの木々に巣箱が掛けられた。畑を害虫から守る為である。同時代、北ヨーロッパでは春先の食料備蓄が底をつく頃の栄養源として卵を盗むために巣箱が掛けられた。もちろん現在この風習はない。地形は氷河が移動して出来たので、ごくごくならかで大きな断層も無く火山はあった形跡もない。だが遠い震源地からごく弱く地震が伝わって来ることもある。僕と妻がフィンランドに来てまもなくの頃だった。デザインの打ち合わせで家具メーカーに行き、仕事が終り出されたコーヒーを楽しみながら雑談中に小さなゆれを感じた。地震だと告げると、心配しなくても良い、日本と違ってフィンランドには地震がないからと優しく言われた。しかしその夜のニュースで珍しく地震があったと伝えられた。次回その会社に顔を出したら、なぜ地震と分かったのだと皆から質問攻めにあった。多分日本人の体内には地震センサーが組み込まれているのだろうと答えた。

森と人々

時代が遡りヴァイキングが世界を我が物顔に横行していたころ、彼等の船団を見ると北欧の他の国々の人々は村の入り口の扉を堅く閉ざし、たてこもって対抗した。しかしフィンランド人達は無駄に戦わず、さっさと森のおくに逃げ込み、そしてヴァイキングの立ち去るのを待ったという。彼等は集落を作らずばらばらに離れて住んでいたらしく、その頃の村らしいものの遺跡がな

*ラハティポリテクニク講師

い。個の確立はこのころから始まり、合理的精神を持ち、森は彼等の命であった。今も森が豊富にあるにも拘らず木材が輸入され、森は大切にされている。

国際環境

ある時、隣国のラジオ番組の視聴者相談室にこんな質問が寄せられた。兄がとても勝手に、そのうえ凶暴で私はいつもびくびくしております、どうしたらよいか教えてください。

あなたたちなら何と答えますか。

これに対しての回答はお隣のケッコネンさんに尋ねられることをお勧めしますというのであった。ケッコネンというのは歴代の優れた政治家の中の当時のフィンランドの大統領である。このジョークがわかればフィンランドの置かれた大変な立場が浮かんでくるのでは？ある時は帝政ロシアの支配下に、その後はスエーデンの、そしてまたロシアの支配下にと自分の王室というものを持ちえなかった民族である。ひとびとが賢明でなければ存在し得なかった国である。そして1917年ロシア革命を機に独立した。芸術、工芸は庇護者が居て発展してきたというのが歴史上大半の事実の様だが、この国は例外の一つである。

もっともロシアの首都で文化の中心であったセント・ペテルスブルクから正直さ、几帳面さ、器用さをかわれて下請け仕事を貰い進歩した貴金属細工、薪が安く豊富に得られたことから貰えたドイツのガラス細工の下請け仕事などで腕を磨くチャンスはあった。

また、庄屋が遠く中央ヨーロッパから買ってきたロココ様式の家具などを見よう見まねに模写して生み出した庶民様式のロココなど豊かになったといわれる現在の日本人から見るとチープデザインと見られがちなデザインのルーツはめんめんと絡まって遺伝子に隠れて居る。

センス

叙事詩カレワラは人間らしい英雄のヴァイナモイネンを中心に物語が雄大に展開するが、ある時、湖で釣れた大かますの顎の骨に乙女の髪毛を張ってつまびくと森の鳥や獣がうっとりとし、聞き惚れ、敵の兵士は戦う気を無くし、涙を流したとある。この豎琴が現在の民族楽器カンテレの源であるという事からして、もともと良い感覚を持ち楽しむことを知っていた民族であることが測り知れる。

教育の考え方

話が飛ぶが、日本のスポーツ選手の練習とフィンランドの選手のそれとは大きく異なる。練習は楽しくなければ長続きしない。これがフィンランドの練習計画を立てるときの基本になっている。要は強くなるのが目的なのだ、だったら楽しくやろうよ、と言って怠けながらだらだらやるということではない。ここがちょっと見ただけでは分からない所である。海外の留学生諸君はこの点に気付かずフィンランドの学生のペースに巻き込まれ課題の締切り間際にフウフウ言っているのを多々見掛ける。

自己管理を小さい頃から身に付けてきたかどうかが問われるところである。フィンランド人が良く使う言葉で“踵から学ぶ”というのがある。すなわち身を持って体験するという事である。この事をここの人達は大切に、その価値を大いに認めている。

この姿勢が自己管理を身に付けさせるのではないかと思う。練習のスケジュールの立て方にも違いが見られる。通常の日本型は何日かおきに休養日が入れているが、フィンランド型は練習の

強弱のリズムがあるだけで練習の休みというものがない。はじめから休まなければならないような無理な練習の仕方をしてないのである。

子供達のスキー教育のプログラムにしても子供達がいかに楽しく遊べるかという事を考えて技術習得に繋いでいる。積み重ねこそ近道と考えいろいろな違った遊びを組み合わせで基本技術を教えていく、この事からも想像が付くように子供達が自分で見付け出す方向に指導していく事が教育の基本姿勢となっている。このような教育を受けておらず習慣が付いていない外国からの留学生たちは課題が出された時にすでに大きな困難にぶつかる。

まず言葉のギャップがあり、出題の傾向が違う事で、問題じたいが分からない。

日本の留学生だけではないが、このような課題は出された事がないという事を口にする。この事がこちら、教える側としてはとても不思議に感じる事になる。

こちらの学生の口からは決して出ない言葉であるからだ。新しい事へのチャレンジこそ、生きがいと思っている学生と、指導してもらって知識を沢山詰め込みたいと思っている学生の違いであろう。おぼろげに課題が分かってその取組かたがわからないという事になる。そしてフィンランドの学生たちが楽しみながらコツコツとちょっとの時間を見ては課題を考え咀嚼しているのが外からはわからない、彼等に遊びに誘われれば大いに楽しみ、言葉のハンディーに疲れ切って課題はちちとして進まず、締切り期限は近付いて来る。

このパターンを経験する事で何かを掴んでくれることを祈っている。

大学受験資格試験

これも大きなちがいののだが、大学受験には学科試験がない。なぜなら全国一斉の大学受験資格試験でそれは済んでいるからである。さてこの受験資格試験であるが、7日間朝から晩までぶっとうし行われ、丸ペケ、選択して印を付けるタイプのもは一切なく、すべて記述である。出題は数題ある中から決められた数を選んで回答すれば良いことになっている。採点は各科目6段階に分けられ、途中まで正しければそこまでの点が貰えるわけである。だから山を掛けることは必要ない。しかし採点する側にとっては実に大変な仕事である。果たして日本にはこのような試験の実施を受け入れる用意があるであろうか。

入学試験

さて入学試験であるが、2段階に別れる。まず2月に告示される課題の作品を提出し、その選抜を通過した人が6月初旬の実地試験に招集される。

選抜の課題であるが、我々が目指している方向に向いているか、素養はあるか、基本的な力は、等を知るため毎年頭を使う。デザイナーは人に貢献する為の職業という共通認識が我々には強く、建設的であることを大切にしている。何を人生に求めているか、物ごとの価値の基準をどこに置いているか、性格、感覚など作品から読み取れるような課題を作る。感覚だがあまり独り善がりやで個性的過ぎる感覚の人はデザイナーには向かないと考える。さて出題の実例であるが、身の回りにある片手で持てる大きさの物で気に入ったデザインのものを描き、なぜ気に入っているのかを説明し、良く知られたあこがれのデザインから一点を選び描き、なぜ選んだかを述べよ、などはかなりの事を伝えてくれる。

また、現在の住居の自分の気に入っている場所に立たずんでいる自分を描け、これなどもいろいろ読み取れる。どの様な場所に、どの様なポーズで、それをどの様な角度から描いているか、

表情は、色調は、人と物との大きさのバランス、醸し出している雰囲気等々。ここでアナキーな雰囲気の感じられるものはマークされる。

立体作品課題では試験のためといえど自然保護リサイクルなどの点に注意し我々の姿勢が伝わるような課題造りに頭を悩ませる。

例えば1週間入院する必要がある、その時にもって行く組み立て分解式の書見台を廃材の段ボールで作れなどは、自負している課題である。あまり力の入ったものばかりではなく、立って使える靴べらを廃材の木で作れなど、材料を読み取る力、器用さを同時に見られる課題も混ぜる。これは審査する我々も楽しい。ほれほれする仕上がったものもあるし、オイオイ、君送る前に自分でこの靴べら使ってみたの？という物もある。この様な5点の課題作品を総合的にチェックし1学科が定員10人のところに40人程を招集する。実技試験はより深く広く適性を知るために出題を考える。

出題の例

学舎の気に入った1コーナーとか道具の鉛筆デッサン、粘土でのインスタレーション。これは各学科とも毎回出題している。ID科になると例えばサイクリングに携行する為のポケット工具など。出来るだけ身近なものでおもしろそうな物を課題に選ぶ、試験も楽しくなくてはと考える。自転車は学生が乗ってきたものが庭にあるし、それを見て参考にしたか、確かめたかなどは面接の時に作品を前にしてのデザインの進め方等でチェックする。傾向の違う課題2点を出すこともある。常に身近にあり使い方、機能などを知っているものを課題する様に心掛けている。提出作品は思考行程が分かるアイディアスケッチ、試作用図面、使い方を書き込んだレンダリング等とモデルだが、モデル作りの材料は出来るだけ環境汚染のない物を選んでる。細い角材と糸だけで規定の加重に耐える橋を作る課題は何度も出しているが楽しい。ここでは機能、美しさ、独創性が試される。端材からの角材造りは技官の仕事である。クラフトに成ると課題が感覚を見ることに重きがおかれるが、絵に描いた餅の課題はなくすべて作ることを含んでいる。このような試験を潜ってきた学生と学ぶことになる。

Give and Take

海外留学では学生との交流で学ぶ事が非常に多い。外国に留学をするからにはしっかりと与えられるものも身に付けて来てほしい。またフィンランドの諺であるが"斧は両側から研げ"と言う。片減りさせてはならないという事である。この言葉の意味をこれからの留学希望者はしっかりと考えて来てほしい。アナタたちはどれだけ日本の文化を身に付けていますか？それと語学力には決して充分という事はないという事を覚えておいてほしい。疑問は尋ねなければ解決しない場合が多い。

尋ねるには、しゃべる必要がある。

世間

また話が変わるが、10月13日の土曜日の午後首都ヘルシンキの郊外の大型スーパーで自爆事件があった。その事件で7人が亡くなり、60人以上が怪我をした。その犯人が化学を学ぶ19才の学生という事でフィンランド中が騒然となった。コンピューターで爆薬の知識を集め、爆発に関心を持つ人々のフォーラムに参加し、バスケットボールを楽しむ、目立たない、世間全般に反感を

持った青年の緻密な犯行という事がのこされたメモで分かった。この事件に対する反応であるが、青年を孤立に追い込んだのは我々である、彼も今の社会の被害者である、なんとかしなければという事に世間の関心の重点がある。事件を視聴率の道具と使うマスコミ、その番組にかじりつく人々。僕も日本に居たら流されていたと思う、この傾向はなんとかしたい。日本を外から見ることもできるチャンスとしても留学は意味があると思う。しっかり心構えをして来てくださることを願う。